

コンテナ苗育成技術の確立に向けて

紋別地区種苗協議会 遠藤 貞

1. 課題を取り上げた背景

北海道にコンテナ苗が導入されたのは、平成 23 年とまだ日が浅く、その技術開発に向けて各苗木生産者が努力しているところである。

コンテナ苗については、あまり知らない植付業者もいることから、コンテナ苗を普及させるためにも、良い点を P R する必要がある。そのため、コンテナ苗の養苗・植付等の諸課題を解決すべき取組んでいくことが重要である。

2. 取組みの経過

まず、コンテナ苗の問題点を洗い出した。平成 23 年度「コンテナ苗植付実行者の意見」を集約すると、

- ①コンテナ苗幼苗移植に手間がかかる→幼苗をセルに移植
- ②コンテナ苗を容器から抜くのに手間がかかる→鉢底ネットの使用
- ③トドマツコンテナ苗の供給不足
- ④春期のコンテナ苗が不足
- ⑤コンテナ苗山出しに手間がかかる→コンテナ容器での山出し
- ⑥コンテナ苗の大量輸送が出来ないか→大型輸送用コンテナの利用
- ⑦植付時根鉢を痛めない器具の開発が必要→背負子の開発
- ⑧苗木の小運搬に適した器具の開発が必要
- ⑨植えやすい器具の開発が必要→現在試行中
- ⑩コンテナ苗は普通苗より価格が高い
となっている。

3. 実行結果

1) コンテナ苗育苗期間の短縮

規格に達した幼苗を使用しての移植により、育苗期間の短縮を図ることが出来た。春期の根の生長期に合わせ出来るだけ早く移植することにより秋の根の生長期を過ぎれば根鉢は形成され、山出しすることができる。

根の生長期を 2 回から 3 回経過すれば根鉢は形成され山出し出来ることがわかった。このことにより、秋の需要に合わせたコンテナ苗の生産が出来ること、また翌春の需要を予測した生産が可能となり、苗畑としては過剰にコンテナ苗の在庫を抱える心配が少なくなる、と考えられる。

2) コンテナ苗関係の機械・器具の開発

- ①Mスターコンテナ苗移植器具②コンテナ苗幼苗移植器具
③底鉢ネット④コンテナ苗抜き取り機⑤ラップ包装機⑥背負子

4. 考 察

コンテナ苗を普及させるには、コンテナ苗のメリットである活着が良い生長が良い、植付期間の拡大などに対応した良い苗を作ることが重要である。コンテナ苗を植えることにより造林費の削減に繋がれば需要も増加することが見込まれる。

コンテナ苗を一度に大量に輸送する効率化と、大型輸送用コンテナをフォワーダ等の重機により植栽地の中心部まで運搬し苗木の小運搬に係る労働の軽減を図ることが可能である。更に植付地までは背負子などで容器のまま運搬植付を行えば根鉢を痛めない。

川上である造林者側と川下であるコンテナ苗木生産者側とがお互いに同じ目的を持って、今後のコンテナ苗木の普及拡大に向けて関係機関と共同でコンテナ苗の普及に向けて調査研究を進めていく予定である。